2010 年 6 月 28 日

関係各位

平成 22 年度新入社員（2,663 人）の「働くことの意識」調査結果

公益財団法人　日本生産性本部／社団法人　日本経済青年協議会

公益財団法人日本生産性本部（理事長　谷口恒明）の「就職力センター」（所長 夏目孝吉、研究主幹 岩間夏樹）と社団法人 日本経済青年協議会（代表幹事　大塚恒博）は、平成 22 年度新入社員を対象に実施した「働くことの意識」調査結果をとりまとめた。この新入社員の意識調査は、昭和 44 年度に実施して以来 42 回目を数え、この種の調査ではわが国で最も歴史のあるものである。

平成 22 年度新入社員(2,663)人の「働くことの意識」調査の主要結果

●**「第一志望の会社に入れたか」**では昨年の 62.3%から 55.2%に減少した。平成 22 年度入社組の就職活動が厳しかったことがうかがえる。〈3 頁参照〉

●**就職先の企業を選ぶ基準**では、最も多かった回答は「自分の能力、個性が生かせるから」で、全体の 34.8%であった。以下「仕事がおもしろいから」(24.8%)、「技術が覚えられるから」（9.0%）など、個人の能力、技能ないし興味に関連する項目が上位を占めた。調査開始当初（昭和 46 年～48 年） 1 位だった「会社の将来性」は 8.3%にまで減少した。上位 4 位までを見ると、「自分の能力や個性が活かせるから」と「仕事がおもしろいから」が増加し、「技術が覚えられるから」と「会社の将来性」が減少する傾向を見せている。〈6～7 頁参照〉

●**仕事中心か生活中心か**では、「仕事と生活の両立」という回答が大多数（82.8%）を占め、「仕事中心」(9.2%)、「生活中心」(7.9%)、という回答を大きく上回った。〈3～4 頁参照〉

●**「デートか残業か」**では「残業」(85.3%）が「デート」(14.2%）を大きく上回り、<u>過去最高の開き</u>となった。男女別に見ると「残業派」が男性 81.9%、女性 88.8%と、女性のほうが仕事を優先する傾向が強い。〈9 頁参照〉

●**就職活動で利用された情報源**では、ここ 2 年「インターネットの企業ホームページ」が全体で 1 位だったが、今年は昨年 2 位だった「会社説明会」(90.3%)が 1 位に復活した。〈5 頁参照〉

●**「第二新卒として転職を考えているか」**を聞くと、全体の 83.6%が「いいえ」と回答し、「はい」(13.9%）を大きく上まわった。〈11 頁参照〉

【本件に関するお問い合わせ先】

公益財団法人 日本生産性本部〔社会労働部：高野　tel.03-3467-7252　fax.03-3467-7254〕

社団法人 日本経済青年協議会〔担当：片寄、畔津　tel.03-3469-2381　fax.03-3481-5726〕

※本調査の報告書は、「生産性労働情報センター」(tel.03-3409-2508）より発刊。

平成 22 年度新入社員「働くことの意識」調査結果の概要

Ⅰ．本調査の沿革

本調査は昭和 44 年（1969 年）以来、毎年 1 回、春の新入社員の入社の時期に継続的に実施してきた。新入社員を対象とするものとしてはもちろん、就労意識をテーマとする調査として他に例を見ない長期にわたる継続的な調査である。これまで約 40 年にわたり、ほぼ同一の質問項目で実施しており、非常に興味深いデータの経年変化が蓄積されてきた。しかし、昨今の終身雇用制の後退、若い世代の価値観の変化などを背景に、時代にそぐわない質問項目が散見されるようになってきた。そこで平成 13 年（2001 年）の実施にあたって、いくつかの質問項目を入れ替えた。もちろん、これまでの時系列データの資産的な価値を重視し、多少、最近の新入社員には無理があると思える質問も、極力残す方向でリニューアルをした。今年度はリニューアル後 10 回目の調査となる。

Ⅱ．調査の概要

(1)**調 査 期 間** ：平成 22 年 3 月 3 日から同年 4 月 30 日

(2)**調 査 対 象** ：平成 22 年度新社会人研修村（オリンピック記念青少年総合センター）に参加した企業の新入社員

(3)**調 査 方 法** ：同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を配布し、その場で調査対象者に回答してもらった。

(4)**有効回収数** ：2,663 件(55 社)

(5)**回答者プロフィール** ：

回答者プロフィール表

(%)

性別		最終学歴		業種		会社規模	
男性	50.3	普通高等学校	9.4	建設	4.3	99人以下	0.1
女性	49.6	職業高等学校	1.5	製造	4.4	100～499人	5.9
不明	0.2	工業専門学校	2.4	卸小売	31.1	500～999人	13.0
		短期大学	3.9	金融保険	1.8	1000～1999人	16.7
年齢		4年制大学	69.2	不動産	2.3	2000～2999人	6.6
16歳以下	0.0	大学院	5.2	運輸通信	0.2	3000～3999人	0.8
17歳	0.4	専修・専門学校	7.4	電気ガス水道熱供給	0.0	4000～4999人	40.0
18歳	9.6	各種学校	0.3	外食産業	7.2	5000人以上	17.0
19歳	0.7	その他	0.8	情報関連サービス	9.4		
20歳	9.7	不明	0.1	その他サービス	36.4		
21歳	2.5			その他	2.9		
22歳	53.8						
23歳	12.2						
24歳	6.4						
25歳以上	4.7						
不明	0.1						

＊回答数値は小数点第２位を四捨五入している

Ⅲ．本年度新入社員の特徴

1．厳しかった就職活動
――「第一志望に入社」が半数強に減少

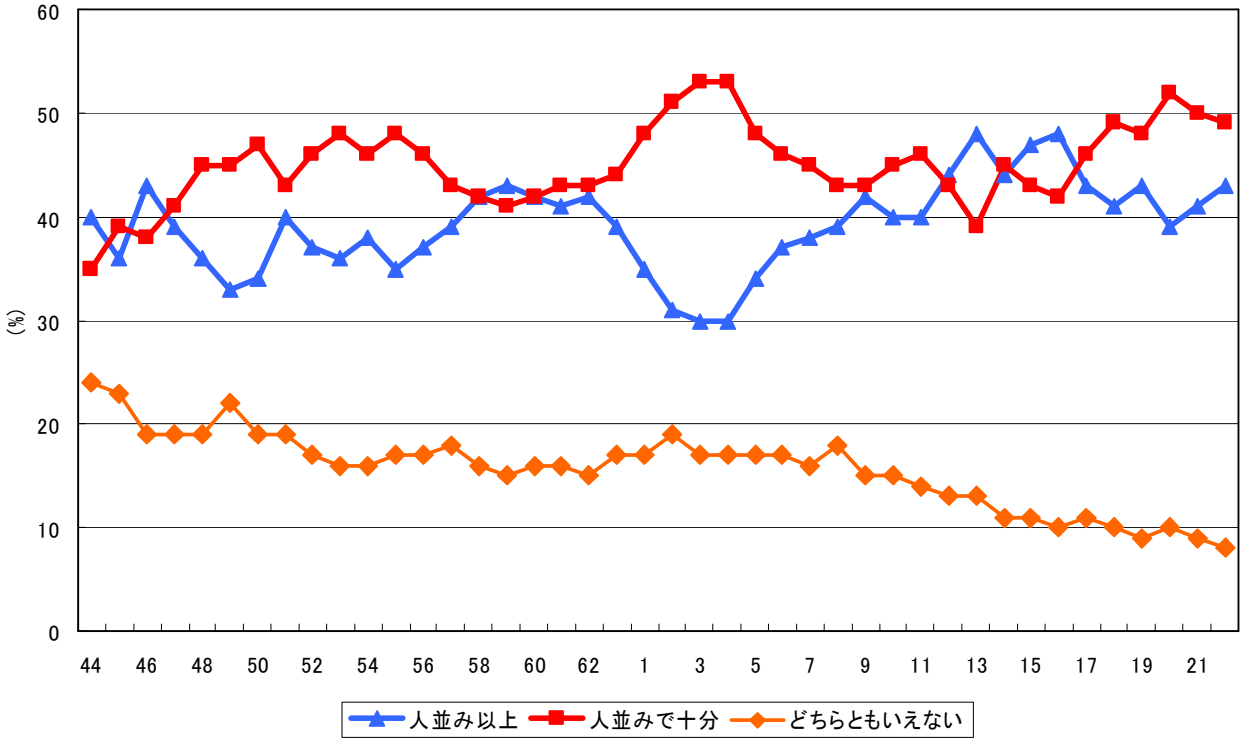
平成19年入社組あたりから新卒採用が増加し、平成20年入社組については本格的にポスト氷河期に入ったと言われた。その流れを受けて、昨年は採用そのものは順調だったものの、土壇場になって世界金融危機をきっかけとする経済不安から内定取り消しが出たことが話題となった。その流れを受けて、本年入社の新入社員については採用を絞った企業が多かったため、一転して就職活動は非常に厳しいものになったようだ。それが「第一志望の会社に入れた」とする回答は昨年の62.3%から55.2%に減少したことに表われている。

「人並み以上に働きたいか」(Q8)では「人並み以上」が平成19年42.8%、20年38.5%、21年41.0%、本年43.0%に変化し、「人並みで十分」が19年47.9%、20年51.9%、21年50.3%、本年49.3に変化している。19年から20年に見られたバブル期のような「お気楽志向」が退潮したように見える。

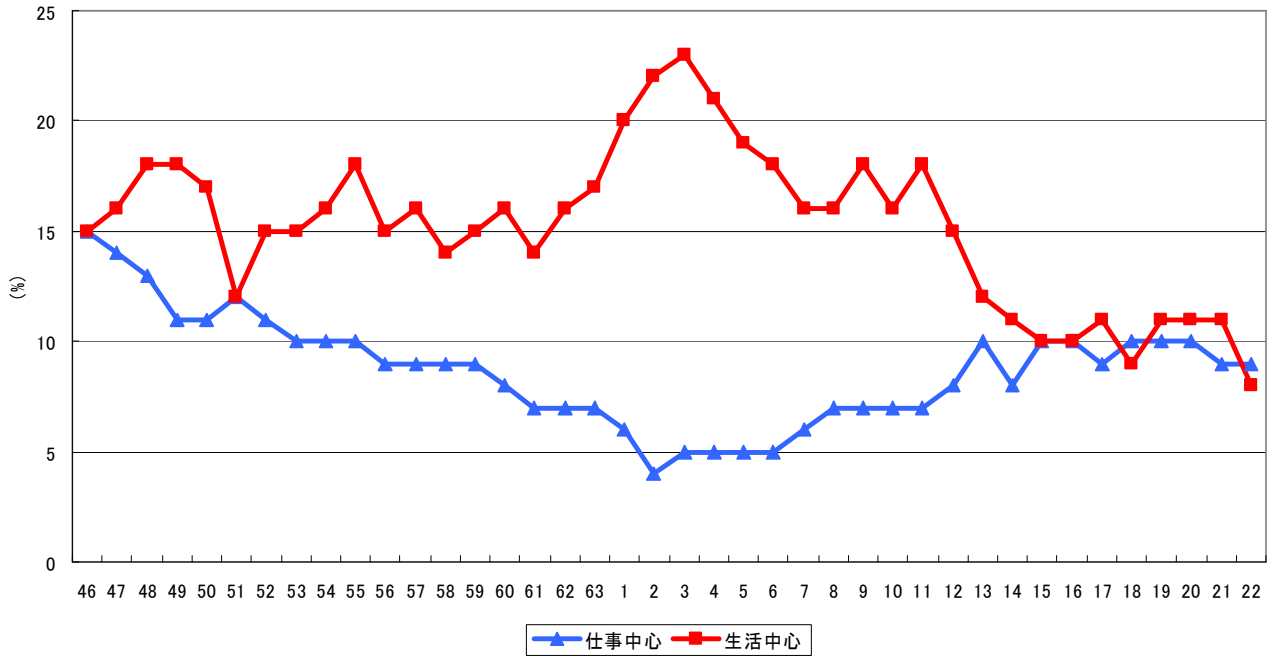
「いずれリストラされるのではないかと不安だ」(Q11-4)は前年の46.1%から41.0%に、「いずれ会社が倒産・破綻するのではないかと不安だ」(Q11-5)は前年の27.7%から26.4%にそれぞれ減少し、会社の経営の安定性に対する不安は多少好転している。「世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう」(Q30-18)も昨年47.6%から48.2%に増加している。就職活動は厳しかったが、将来に対する見通しが若干改善している。

「仕事と生活のバランス」(Q6)については、「両立」派が大多数であることに変わりはない(82.8%)。しかし、ここでは新たな傾向も見られ、「生活中心」派はバブル期をピークにその後減少傾向に、同様に「仕事中心」派はバブル期をボトムに増加傾向にあったが、ここ数年、その傾向が鈍り始めた(「生活中心」、昭和46年15%→平成3年23%→平成13年12%→本年7.9%、「仕事中心」15%→5%→10%→9.2%)。

Q8 人並みで十分／人並み以上に働きたいか（経年変化）

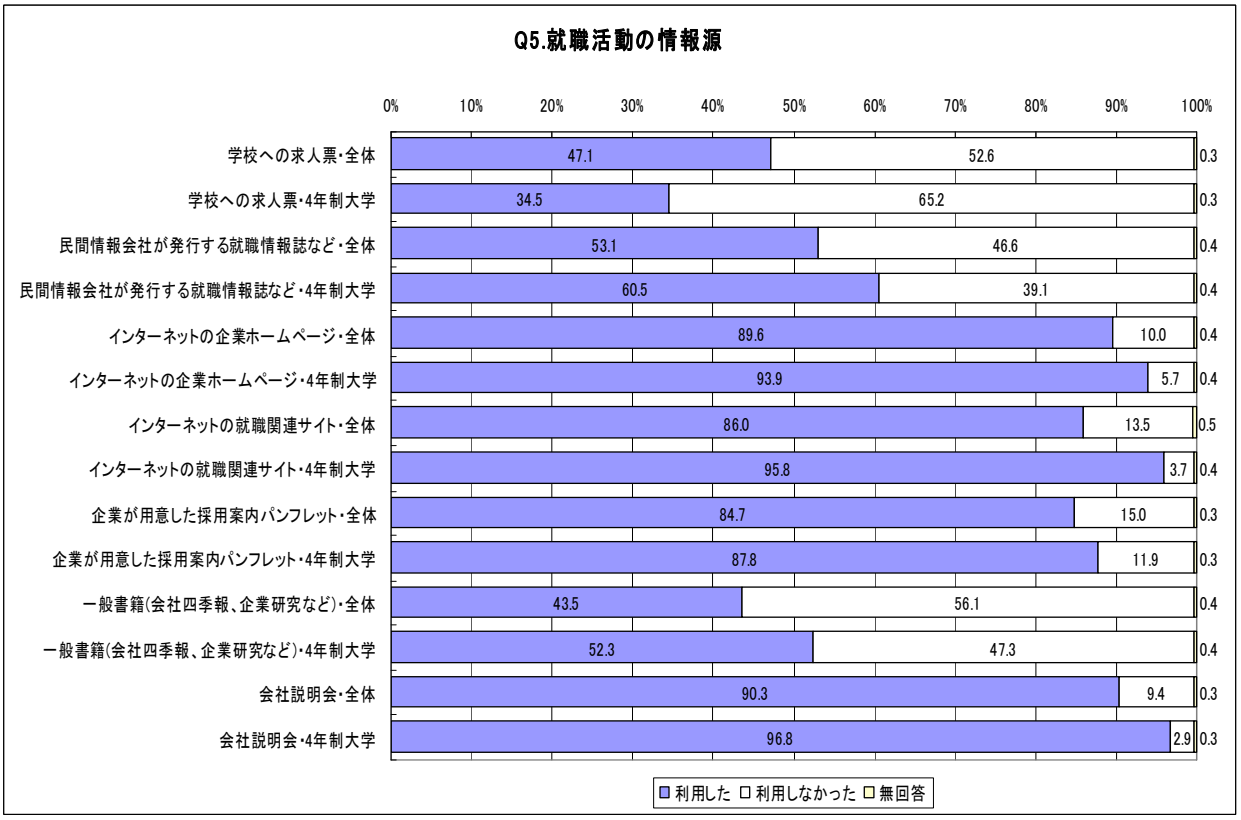


Q6 仕事中心／生活中心（経年変化）



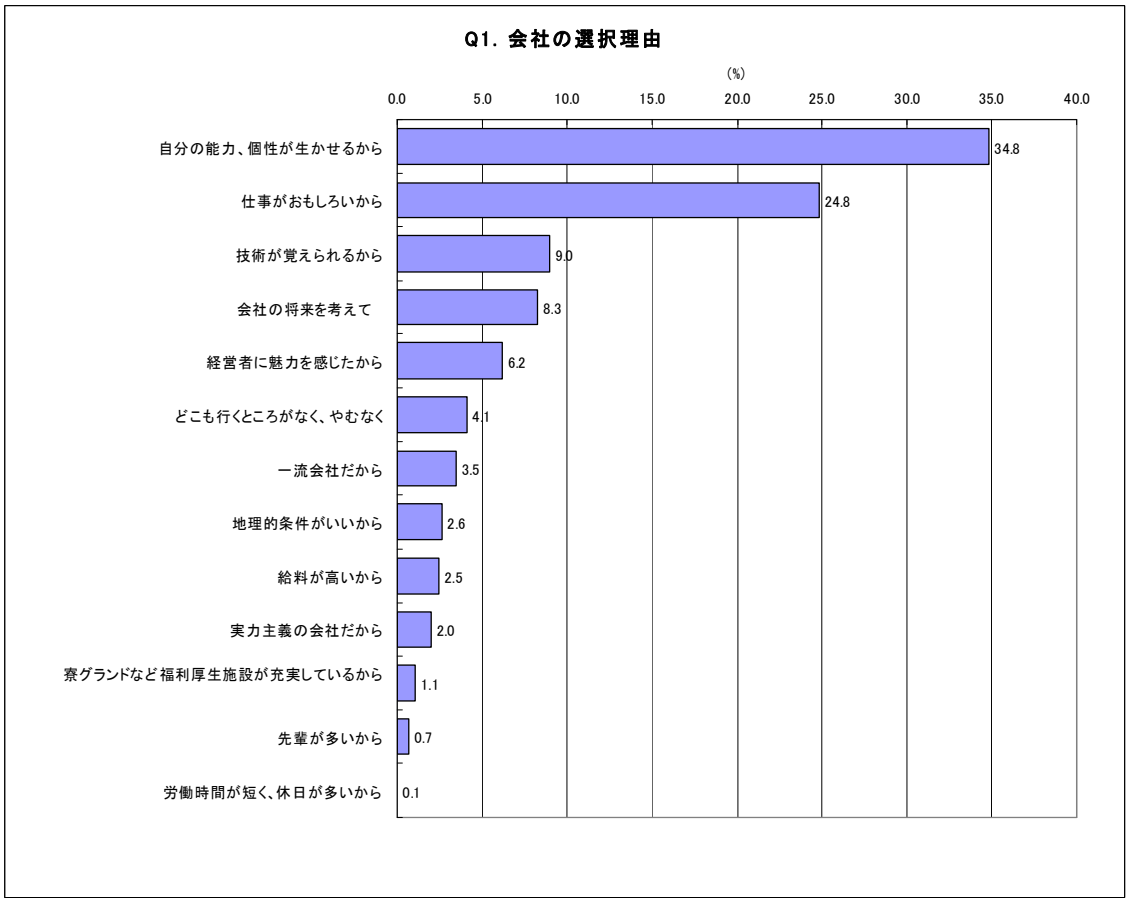
2. 就職活動の情報源――「学校への求人票」が減少

就職先を選択するにあたって利用した情報源（Q5）は、利用度の高い順に「会社説明会」（90.3%）、「インターネットの企業ホームページ」（89.6%）、「インターネットの就職関連サイト」（86.0%）、「企業が用意した採用案内パンフレット」（84.7%）、「民間情報会社が発行する就職情報誌など」（53.1%）、「学校への求人票」（47.1%）、「一般書籍（会社四季報、企業研究など）」（43.5%）となる。「学校への求人票」が昨年の54.2%から47.1%に減少したのが目立つ。

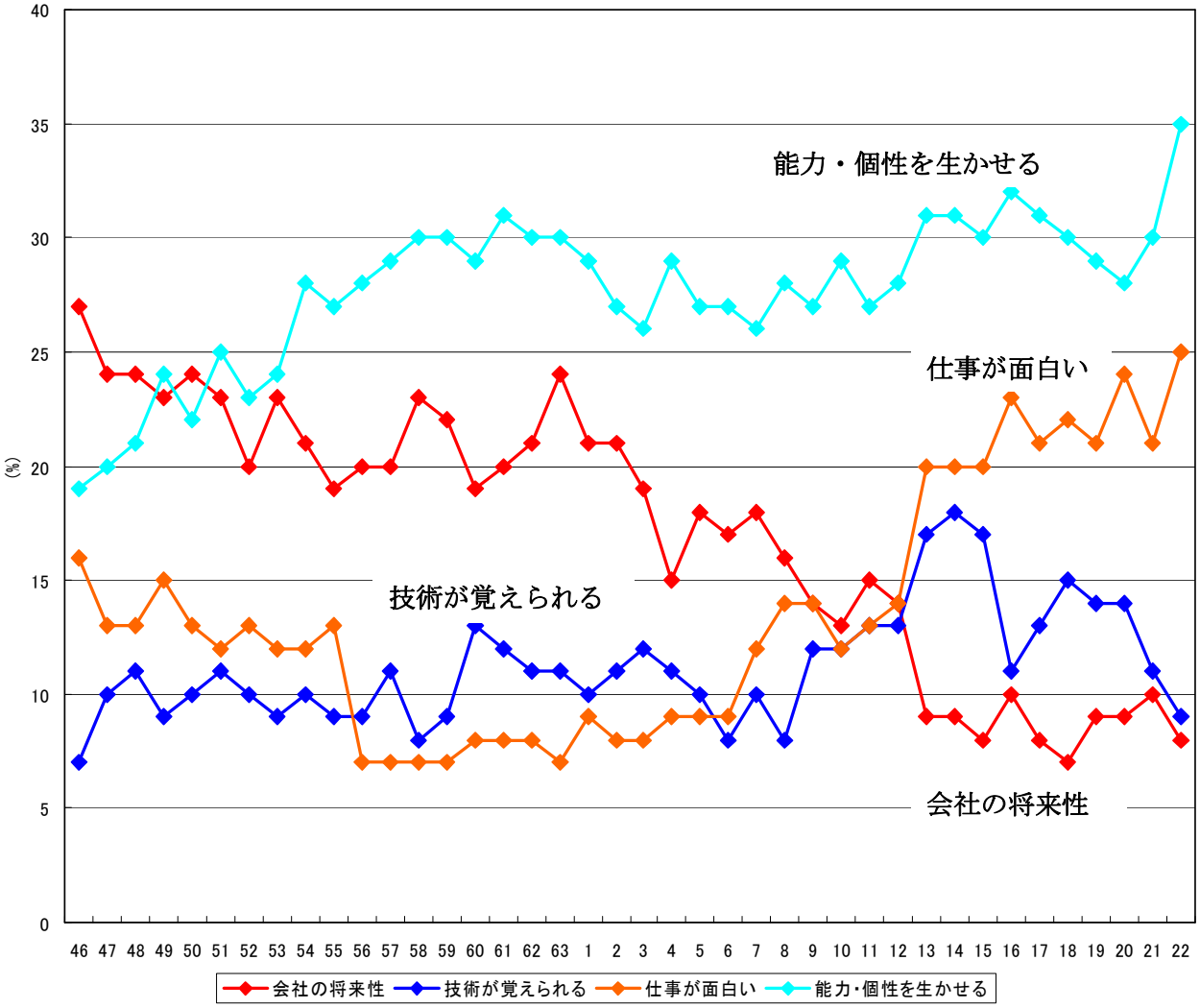


3. 会社の選択基準――「就社」から「就職」へ　能力・個性を重視した会社選び

「会社を選ぶとき、あなたはどういう要因をもっとも重視しましたか」（Q1）という質問に対して、最も多かった回答は「自分の能力、個性が生かせるから」で、全体の34.8%であった。以下「仕事がおもしろいから」（24.8%）、「技術が覚えられるから」（9.0%）が上位を占めた。このような個人の能力、技能ないし興味に関連する項目に比べて、勤務先の企業に関連する項目、「経営者に魅力を感じたから」（6.2%）、「一流会社だから」（3.5%）、「福利厚生施設が充実しているから」（1.1%）などの低い数値であった。終身雇用制の後退を背景とする、昨今の「就社」より「就職」という傾向を反映しているものと思われる。会社選択の要因（Q1）の経年変化で興味深いのは、昭和46 年度には 27%でトップに挙げられていた「会社の将来性」が、１ケタ台にまで落ち込み 8.3%にまで減少したことだ。



Q1会社の選択理由（経年変化）



4. 就労意識――“感謝される仕事がしたい”が１位

就労意識について 13 の質問文をあげ、「そう思う」から「そう思わない」まで 4 段階で聞いてみた（Q11）ところ、肯定的な回答（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）の比率は以下のような順になった。

就労意識のランキング（Ｑ．１１）

各項目の順位の次の数字は調査項目の質問番号　　（%）

1 位	13. 社会や人から感謝される仕事がしたい	96.5
2 位	7. 仕事を通じて人間関係を広げていきたい	95.8
3 位	3. どこでも通用する専門技能を身につけたい	93.4
4 位	12. これからの時代は終身雇用ではないので、会社に甘える生活はできない	85.4
5 位	9. 高い役職につくために、少々の苦労はしても頑張る	82.7
6 位	1. 仕事を生きがいとした	79.3
7 位	6. 仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる	63.6
8 位	2. 面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない	58.1
9 位	4. いずれリストラされるのではないかと不安だ	41.0
10 位	11. 職場の上司、同僚が残業していても、自分の仕事が終わったら帰る	30.9
11 位	8. 仕事はお金を稼ぐための手段であって、面白いものではない	28.7
12 位	5. いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ	26.4
13 位	10. 職場の同僚、上司、部下などとは勤務時間以外はつきあいたくない	17.8

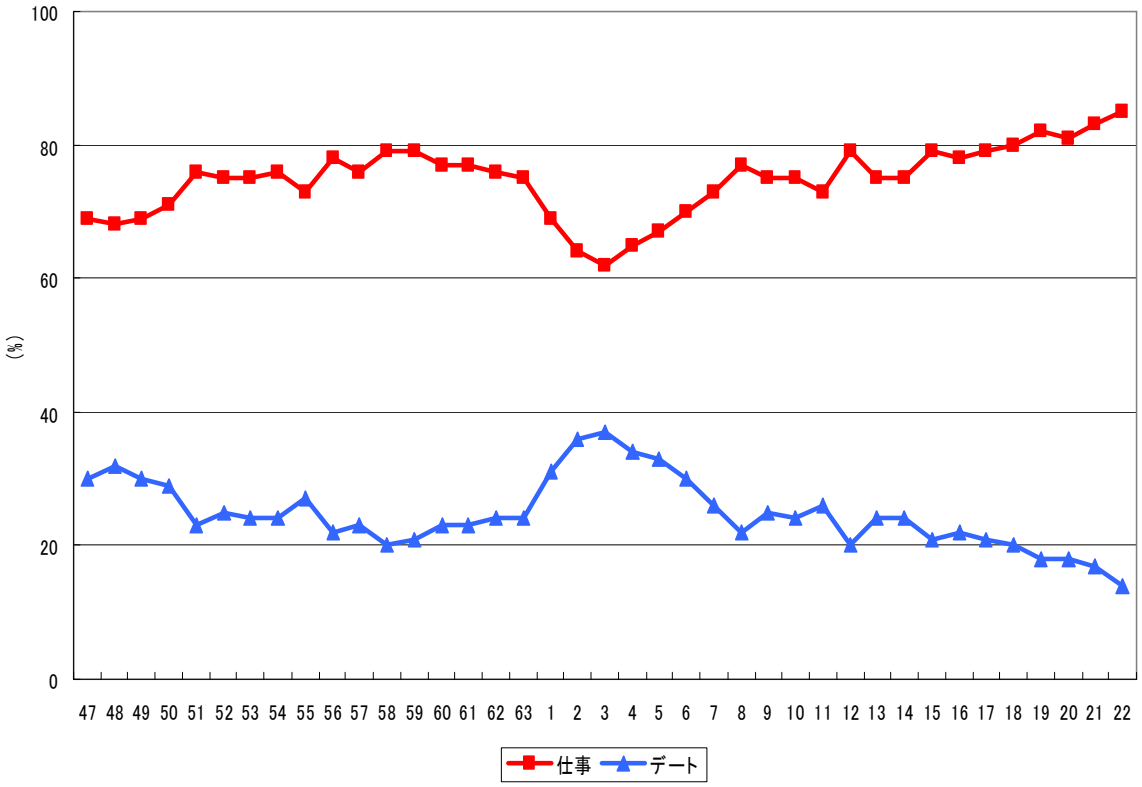
総じてポジティブな項目が上位を占める傾向があり、反対に、ネガティブな項目が下位を占める。職場の人間関係にドライな若い世代が多いというイメージがあるが、この結果を見る限り、新入社員たちは職場の人間関係に大きな期待をもっている。反面、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる」も 63.6%あり、職場の人間関係が新入社員の大きな関心事であることがわかる。

また、ここでも専門技能への関心が見られ、これからの職業生活において、個人の専門技能をよりどころとしていきたいとする意向がうかがえる。

5. デートか残業か――プライベートより仕事を優先が多数派

「デートの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」(Q15) という質問に対しては、「デートをやめて仕事をする」(85.3%)、「ことわってデートをする」(14.2%) と、プライベートな生活よりも仕事を優先する意向が伺える。男女別に見ると、「デートをやめて仕事をする」という回答は男性 81.9%に対して、女性 88.8%と女性のほうが上回っている。

Q15 デートか残業か(経年変化)



6. 生活価値観――目立つ“ポジティブ志向”

一般的な生活価値観について16の質問をした（Q30）。4段階のうち「そう思う」「ややそう思う」の合計%で順位づけると、おおむね、積極性を示す項目が上位を占め、消極性を示す項目が下位を占めた。1 位となったのは「(14) 人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ」(91.1%) で、以下、2位が「(13) 明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる」(87.7%)、3位が「(22) 将来の幸福のために、今は我慢が必要だ」(85.3%)であった。

「人間関係では上下関係のけじめが大切」が1位となったが、別項目（Q11）にも「仕事を通じて人間関係を広げていきたい」(95.8%)、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる」(63.6%) といった結果があり、新入社員にとって職場の人間関係が微妙な問題として意識されていることがうかがえる。

重視する生活価値観（Ｑ．３０）

各項目の順位の次の数字は調査項目の質問番号　　(%)

1位	14. 人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ	91.1
2位	13. 明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる	87.7
3位	22. 将来の幸福のために、今は我慢が必要だ	85.3
4位	23. 他人にどう思われようとも、自分らしく生きたい	81.0
5位	12. すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる	78.9
6位	20. 自分はいい時代に生まれたと思う	68.5
7位	16. あまり収入がよくなくても、やり甲斐のある仕事がしたい	67.0
8位	17. 企業は経済的な利益よりも、環境保全を優先するべきだ	57.3
9位	15. たとえ経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らすほうがいい	57.0
10位	21. 冒険をして大きな失敗をするよりも、堅実な生き方をするほうがいい	56.4
11位	10. 世の中、なにはともあれ目立ったほうが得だ	55.0
12位	18. 世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう	48.2
13位	19. 世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった	48.0
14位	9. 自分と意見のあわない人とは、あまりつきあいたくない	45.0
15位	11. リーダーになって苦労するよりは、人にしたがっている方が気楽でいい	43.8
16位	8. 周囲の人と違うことはあまりしたくない	36.2

7. ８割強が“第二新卒の転職にノー”

平成 16 年から、継続調査の項目に加え、その年に関心を集めた話題などについて、一年限りの質問項目を設定している。今回は、昨年にひき続き「第一志望の会社に入れたか」と、関連して「第二新卒として転職を考えているか」を聞いた。

まず「第一志望の会社に入れたか」（Q33-1）かどうかを尋ねると、「はい」と回答したのは全体の 55.2%で、昨年の 62.3%から減少した。男女別では男性 57.5%、女性 52.9%とやや男性優位であった。

「第二新卒として転職を考えているか」（Q33-2）では、全体の 83.6%が「いいえ」と回答し、第一志望の会社に入れなかった新入社員が半数近くいるものの、大多数は現在の勤務先にとどまる意向を示している。

参考．本調査に関連する出版物について

本調査を素材として以下の出版物が上梓されている。あわせて参照いただければ幸甚である。

日本生産性本部「職業のあり方研究会」「履歴書の会」編『新社会人白書 2009』労働調査会

岩間夏樹著『若者のトリセツ』生産性出版

岩間夏樹著『新卒ゼロ社会――増殖する「擬態社員」』角川新書

岩間夏樹著『若者の働く意識はなぜ変わったのか』ミネルヴァ書房